文 フレッド・バーンシュタイン　写真 ジェームズ・ランサム

AMERICA'S TOP MODELS

アメリカン・トップ・モデル

リチャード・マイヤーの白を基調とする建築は、中国からイスラエルのテルアビブまで世界各地に点在しているが、ニューヨークにある彼の建築模型博物館を訪ねると、ミニチュア・サイズで彼の建築観を一望できる。ここには、代表作であるカリフォルニアのゲッティセンターと並び、実際に建築されずに終わった試作の模型も展示されている。

建築設計事務所がつくる建築模型といえば、厚紙や発泡ボードを使ったいかにも間に合わせといった感じのものがほとんどだ。それらはおよそ美的とは言い難く、役目を終えれば倉庫でほこりを被る運命をたどるのが常だが、マンハッタンに事務所を構える建築家リチャード・マイヤーの場合、事情は異なる。世界でも屈指の優美な美術館や博物館をはじめとして数多くのプロジェクトを手がけてきた彼は、自らの建築に対して徹底した完璧主義を貫く。だから、建築模型にも妥協を許さない。彼のもとで修業する若手は、実際の建築に関わる前に、まず模型製作部門に配属され、木製の建築模型を手づくりすることから覚えなければならない。

マイヤーは、惜しむことなく手間ひまをかけて、思わず目を見張るほど表情豊かな建築模型をつくる。建築家として50年ものキャリアを重ねてきた彼は、これまでに製作した建築模型を大切に保管しているのだ。高さ15センチほどの小さな試作モデルから、建物の階段室など主要部分の実物大モデルまで、その数は数百点にもなる。意匠図などの図面と違って、模型はファイルに収納したりデジタル化したりすることはできない。そこでマイヤーは、15年ほど前から、ロングアイランドシティに倉庫を確保し、そこに数十点の模型を保管している。マンハッタンのスタジオから6キロほど東に位置するこの倉庫に、時折、人を招いて模型を見せていたが、4年前から建築模型博物館として一般公開し始め、このほど国際建築博物館連盟（ICAM）に加盟した。

来館者は、マイヤーの建築世界を探訪しながら、ここで午後のひと時を過ごす。マンハッタンのウエストサイドにそびえる優美なタワーマンションや、オランダのヒルフェルムスに佇むオランダ王立製紙工場本社の純白の社屋の模型も、ここで見ることができる。プラハに建つ瀟洒なオフィスビル「ンティーグリーンコート」や、マンハッタンの事務所が目下、総力を挙げて取り組むメキシコのホテル2棟の模型も、間もなくここに加わる予定だ。

マイヤーの作品を記録・保管しているアーキビストでもあり、博物館の展示責任者でもあるローラ・カルバネクは、「ここを訪れると、リチャード・マイヤーがいかに建築を愛しているか、模型の製作に情熱を注いでいるか、お分かりいただけるでしょう。ラフな概要模型がないのを不思議に思う方もいますが、うちの事務所では、美しくない模型をリチャードに提出することなど、絶対にありえないのです」と断言する。マイヤーの建築模型にも、紙やプラスチックを使ったものがあるが、その多くはバスウッドやマレーシア産の樺材が用いられ、独特の温かみを持つとともに自然な輝きを放っている。マイヤーが設計する建物はほぼすべて白色なのだが、木材で白い模型はつくれない。「もし白い木があれば使いたいよ」というのがマイヤーの本音だ。

模型の展示にもこだわりがある。彼にとって建築模型は単なる実用品ではなく、鑑賞すべき芸術作品なのだ。模型のまわりに彫刻やコラージュを配置しているのも、そういう想いからだろう。彼が数十年にわたってつくり続けてきた膨大な数の建築模型とコラージュは、それ自体が博物館における展示の主題であるが、旅先で見つけた包装紙やチラシなどを素材にしたこれらのコラージュは、彫刻や建築模型とともに、マイヤーの仕事を記録する視覚的日誌ともなっているのだ。

コラージュや彫刻がマイヤーの芸術家としての側面をストレートに表現するものであるのに対し、建築模型は受注の成否を左右する重要な要素であり、建築家の意図を依頼主に伝えるという役割を担っている。建物の空間の質を表現するという点で模型はスケッチよりも優れている、というのがマイヤーの持論だ。最先端の3Dプリンタを駆使して立体の模型をデジタルに生成する建築家が増えているこの時代にあって、マイヤーは

（上）ニューヨークのチャールズ通り165番地に建てられたアパートメントの模型（2003～2006年）。プラスチック製。
（右）ニューヨーク、コーネル大学学生寮の模型（1974年）。プラスチック製。このプロジェクトは実際に建築されることなく終わった。
［前見開きページと左ページ］ロサンゼルスのゲッティセンターの模型（1984～1997年）。マレーシア樺とバスウッド製。

建築模型をすべて手作業で仕上げている。それも釘やネジさえも使わないという徹底ぶりだ。

ゲッティセンターの設計プロジェクトが進行していた当時、マイヤーの模型製作部門を統括していたマイケル・グルーバーは、「手作業で模型をつくることで、その建築の持つ本当の意味を理解することができる」と言う。ゲッティセンターはロサンゼルス西部の丘の上に立つ複合施設で、アメリカのアクロポリスと称される。10万平米以上という広大な敷地面積に加えて、組織の複雑さ――J・ポール・ゲッティ美術館、ゲッティ研究所、ゲッティ文化財保存修復研究所、ゲッティ財団、J・ポール・ゲッティ基金などが集まる――から、マイヤーはおびただしい数の模型をつくらせた。1対48縮尺のある模型は、リビングルームほどの面積を占める。10人がかりで1年半の歳月を要して完成にこぎつけたものだ。そのほかに特筆すべきものとしては、美術館に射し込む自然光の許容量を決定するためのモックアップがある。これは一部屋分ほどもある大規模な模型で、ゲッティ美術館の建設予定地に運び込まれた。マイヤーやキュレーターたちはそのなかに入り、壁に架けられたミニチュアの絵画にどれくらい太陽光が当たるか、身をもって確認したのである。

ゲッティセンターは1997年に竣工し、ロサンゼルスからニューヨークへ戻るマイヤーとともに、建築模型もロングアイランドシティの倉庫へ運ばれ、最上階に収蔵された。模型のなかには、あまりにも大き過ぎて開口部から搬入できず、高さを詰めなければならなかったものもある。建築模型は丁寧に設えられた展示台の上に置かれ、建物の細部の模型は壁に架けられている。

マイヤー自身の手でつくられた初期の建築模型も残っている。コネチカット州ダリエンの丘に立つスミス邸（1967年竣工）の模型は「周囲の景観との調和を見るためにつくった」と本人のコメントはあくまで控えめだが、そこには緻密で見応えのある彫刻の趣がある。スミス邸が瞬く間に現代建築の象徴的存在となりえた所以はそのあたりにあるのだろう。

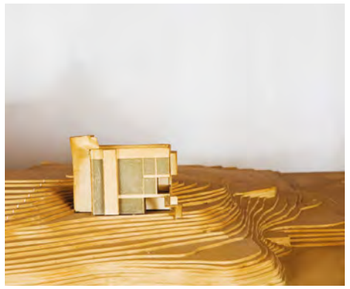
マイヤーは、建築模型の製作をスタッフに任せるようになった後も、時間があればいつも模型製作室にやってくると現シニア・アソシエイトのグルーバーは話す。巨匠は今もなお、部品の廃材の山から、階段やら窓の一部やら、何か見つけてきては組み合わせて、ぎざぎざとした輪郭の彫刻に仕上げるのだ。完成した作品は、長年の友人で著名な画家にして彫刻家のフランク・ステラが懇意にしている鋳造所でステンレスに鋳造される。

金属で鋳造されたマイヤーの彫刻は腕時計のムーブメントに似ている。彼が、スイスの時計産業の町ラ・ショー＝ド＝フォンが生んだ偉大な現代建築家ル・コルビュジエの信奉者であることを考えれば、それも頷ける。ル・コルビュジエは自ら設計した住宅を「住むための機械」と呼んだが、その建築の構成要素が歯車やレバーを想起させるのは、もっともなことではないか。

ニュージャージー州のニューアークで生まれ育ったマイヤーは、コルビュジエのフォルムを継承しながら独自の世界を表現したことで高い評価を受けている。師と同様にマイヤーもまた、フォルムを妨げる要素を徹底して排除している。表面に色彩やパターンを施さないのはそのためだ。マイヤーが必要とする色彩は白だけだ。1984年のプリツカー建築賞受賞スピーチで、「私には白のなかに虹のあらゆる色彩が見える」と語っている。

模型博物館に展示されている模型のなかには、建築されなかったものもある。例えば、ゲッティセンター内にあるロバート・アーウィン庭園もそのひとつだ。1990年代にマイヤーが出した、丘の上に広がる庭園の設計はゲッティの理事会で却下され、採用されたのはカリフォルニアのコンセプチュアル・アーティスト、アーウィンのものだった。マイヤーとアーウィンの戦いは1997年制作のドキュメンタリー映画『コンサート・オブ・ウィルズ』に詳しく描かれている。

この戦いに敗れたマイヤーは、後に手がけたゲッティセンターの最終模型でアーウィンの庭園を残すことになった。「私は、この模型をクライアントのためにつくった。もしも自分のためにつくるなら、自分の設計した庭園を入れただろう」と言う。しかし、将来的に変更できる可能性がないともいえない。「もし自分の庭園に替えることになったら、この模型もつくりなおさないとな」。77歳にしてなお活力みなぎる建築家は「長生きしなくちゃな」と付け加えた。❖



（上）米コネチカット州のスミス邸（1965～1967年）。
（左）ニューヨークのホフマン邸（1966～1967年）。
［右ページ］（左上から時計回りに）ゲッティセンターの模型。マレーシア樺とバスウッド製。ワールドトレードセンター跡地メモリアル・コンペ2002用に製作された模型。グワスミー／シーゲル、スティーブン・ホールとピーター・イースンマンとのコラボ作品。オランダ王立製紙工場本社の模型（1988～1992年）。

MODELS: © RICHARD MEIER